第四表　「ツ」反應陽性轉化率及び陽轉兒童の結核發病率

學年	性別	前年度「ツ」反應陰性兒童數	十六年度「ツ」反應陽轉者數	「ツ」反應陽性轉化率%	十六年度陽轉兒童中の結核發病者數	
					實數	%
二	男	六六〇	五二	七・九	九	一七・三
	女	七〇七	五六	七・九	五	八・九
	計	一、三六七	一〇八	七・九	一四	一三・〇
三	男	七九三	七六	九・六	一一	一四・五
	女	七七三	五九	七・六	六	一〇・二
	計	一、五六六	一三五	八・六	一七	一二・六
四	男	六八四	四五	六・六	一〇	二二・二
	女	六八九	七〇	一〇・二	一二	一七・一
	計	一、三七三	一一五	八・四	二二	一九・一
五	男	七一八	五五	七・七	八	一四・五
	女	六七七	四九	七・二	四	八・二
	計	一、三九五	一〇四	七・五	一二	一一・五
六	男	五八〇	五二	九・〇	五	九・六
	女	六二〇	七三	一一・八	九	一二・三
	計	一、二〇〇	一二五	一〇・四	一四	一一・二
計	男	三、四三五	二八〇	八・二	四三	一五・四
	女	三、四六六	三〇七	八・九	三六	一一・七
	計	六、九〇一	五八七	八・五	七九	一三・五

第五表　十六年度陽轉發病者診斷別

學年	陽轉者數	肺結性	肺浸潤	肋膜炎	肺門腺結核	肺門腺結核?	計
二	一〇八	〇	三	〇	九	二	一四
三	一三五	〇	五	三	七	二	一七
四	一一五	一	五	七	六	三	二二
五	一〇四	〇	四	二	四	二	一四
六	一二五	〇	四	三	七	〇	一四
計	五八七	一（二・二%）	二一（三・六%）	一五（二・六%）	三三（五・六%）	九（一・五%）	七九（一三・五%）

學年	前年度「ツ」反應陰性兒童數	十六年度「ツ」反應陽轉者數	「ツ」反應陽性轉化率%	十六年度陽轉兒童中の結核發病者數	
				實數	%
高一 男	一七一	一九	一一・一	三	一五・八
高一 女	一八六	二八	一五・一	一	三・六
高一 計	三五七	四七	一三・二	四	八・五
高二 男	一九三	二四	一二・四	三	一二・五
高二 女	一七四	三四	一九・五	一二	三五・三
高二 計	三六七	五八	一五・八	一五	二五・九
總計 男	三、七九九	三二三	八・五	四九	一五・二
總計 女	三、八二六	三六九	九・六	四九	一三・三
總計 計	七、六二五	六九二	九・一	九八	一四・二

高一	四七	〇	一	一	四
高二	五八	二	二	三	一五
總計	六九二	三（〇・四%）	二四（三・五%）	二二（三・二%）	三七（五・三%）

第六表　家政女學校生徒精密健康診査成績

學年	檢査人員	ツ皮内反應 陽性者數	陽性率%	容疑者 實數	%
一	一〇九	四五	四一・三	五	四・六
二	一一〇	六二	五六・四	三	二・七
三	一〇〇	五六	五六・〇	二	二・〇
四	一〇九	六九	六三・三	四	三・七
計	四二八	二三二	五四・二	一四	三・三

てゐることは、今後警戒を要する點である。又高等科女子の一學級で前年度「ツ」反應陰性者二五五名中本年度に一七名の陽轉兒童を發見し、中九名が發病し、中一名が死亡したが、種々感染源を調査した結果前年度要休養の指示を與へておいた一名の肺結核兒童が、家庭の無理解から指示を守らず其後數ヶ月間登校を持續した爲と考へられた。學校内に於ける結核兒童への濃厚感染も決して輕視出來ないことを如實に證明してゐる。尚かゝる濃厚感染のあつた本學級で前年度既陽性で異常の無かつた二二名中僅かに一名赤沈速進を認め、他は何れも健康を保持し得たことは極めて興味ある點である。

本年度陽轉發病者を診斷別に示せば第五表の通りで肺門腺結核又はその疑あるものが最も多く、初感染後一年以内に發病し惡化し、肺結核に迄進展したものが前年度と同じく三名あつた。

（二）京橋高等家政女學校生徒精密健康診査

國民學校兒童の精密檢診と併行して、毎年區内家政女學校及び青年學校の一部に於て精密健康診査を行つてゐるが、其の一部を示せば第六表の通りで、一年生は四一・三%、四年生は六三・三%の「ツ」反應陽性率を示し、結核罹病者は三・三%であつた。

（三）學校職員精密健康診査

昭和十一年度以降、毎年繼續して文部省令による使丁給仕を含む區内全學校職員の特別身體檢査を實施し、それに依つて兒童の結核感染源となる危險性ある結核職員の早期隔離と、療養生活の指導を行ひ、傍ら本檢診に際し、特に全學校職員に對する結核豫防教育を圖つてゐるが、本年度の成績は第七表の如くで、要休養者は二名で共に肺結核であり、要監察者は一一名で硬化性肺結核及び廣汎性肋膜癒著肥厚が最も多かつた。

第七表　學校職員特別身體檢査成績

取扱別＼職名	學校長教員舍監及び書記				其他				合計			
性別	男	女	計(%)		男	女	計(%)		男	女	計(%)	
總數	二一六	一五八	三七四		六〇	一九	七九		二七六	一七七	四五三	
要休養	一	〇	一(〇・三)		〇	一	一(一・三)		一	一	二(〇・四)	
要監察	五	四	九(二・四)		二	〇	二(二・五)		七	四	一一(三・四)	
要注意	八	四	一二(三・二)		三	〇	三(三・八)		一一	四	一五(三・三)	
計	一四	八	二二(五・九)		五	一	六(七・六)		一九	九	二八(六・二)	

(四)　未就學兒童の精密健康診査

就學前結核兒童を早期に發見して、國民學校入學迄に治癒を圖り、他方次年度に於て第一學年兒童中の「ツ」反應陽性轉化者を知り得るように、京橋區結核豫防婦人會が主體となり、區役所、警察署、保健館が協働して、昭和十七年度國民學校入學豫定の幼兒一、六八〇名に就いて精密檢診を實施した。尙本檢診は本部と本館小兒衞生部と協働して行つた。其の成績は第八表の如く「ツ」反應陽性率は繁華街のもの最も高く、月島地域のもの最も低く、全地區平均二〇・一%であつた。結核罹病者は六七名で「ツ」反應陽性者の二二・〇%に當り、學童のそれに較べて高かつた。之等結核罹病者を診斷別に觀ると第九表の如く肺門腺結核が約半數を占め、次が肺浸潤、肋膜炎の順である。此

第八表　未就學兒童の結核檢診成績

國民學校隣接地域別	ツベルクリン皮內反應		X線		結核罹病者數	
	檢査人員	陽性者數	陽性率%	檢査人員	實數	線檢査人員に對する%
文海・築地校	一八五	五一	二七・六	三八	八	二一・一
昭和・鐵砲洲校	三九八	七八	一九・六	七四	一五	二〇・三
京華・明正校	三五二	七四	二一・〇	七四	一二	一六・二
月島校	七四五	一三四	一八・〇	一一九	三二	二六・九
計	一、六八〇	三三七	二〇・一	三〇五	六七	二二・〇

第九表　結核罹病未就學診斷別兒童數

性別	結核罹病者數	診斷別				取扱別		
		肺浸潤	肋膜炎	肋膜癒著肥厚	肺門腺結核	陳舊性肺門腺結核	要休養	要監察	要注意
男	四〇	七	二	六	二二	三	四	一五	二一
女	二七	一一	〇	二	一一	三	二	一二	一三
計	六七	一八	二	八	三三	六	六	二七	三四

の中活動性結核と思はれたものが五三名で、中三九名のものが本人は勿論家庭のものも何等病氣を認知してゐなかつた。注目を要する點は一八三家庭（一〇・九%）に於て家族に結核患者があり、結核兒の六七家族中、三二家族に結

核患者があつたことであり、これは幼兒の結核發病は家庭內濃厚感染が主因であることを示してゐる。罹病兒は定期的に來館せしめ、其後の經過を觀察して指導の適正を期し、結核家庭內の「ツ」反應陰性兒一〇五名に對してはB・C・G接種又は「ツ」反應の反復施行をすゝめると共に、極力感染源の除去に努め、結核家族に對しては全員の健康診斷をすゝめた。

第十表　學童に於けるB・C・G接種成績

兒童類別	人員	接種後「ツ」反應陽轉者數			局所反應を呈せし者の數		結核發病者數
		二ヶ月以內	二—六ヶ月後	六—十二ヶ月後	膿瘍	硬結のみ	
B・C・G接種兒童	三三一	三一四（九四・九%）	一六（四・八%）	一（〇・三%）	三〇（九・一%）	一四七（四四・四%）	三（〇・九%）
非接種兒童	二六八六	自然感染による一年間の陽轉者二〇〇名、陽性轉化率七・四%					三六（一・四%）

五、結核豫防接種

結核家族內兒童及び京橋、鐵砲洲兩國民學校の第一學年兒童中のツ反應陰性者に對しては、前年度に引續きB・C・G接種を行つた。其の中後者の成績は第十表の如く、接種後二ヶ月以內に九五%の陽轉率を示し、注射部位に膿瘍を認めたものは九・一%で、接種後一年以內に發病したものは肺門腺結核、縱隔竇膜肋膜炎、肺浸潤各一名計三名で接種者の〇・九%を示し、同年齡で「ツ」反應陰性であつた非接種者からの發病率一・四に較べて幾分低率を示してゐるが、未だ接種例數が少いので其の效果を確認出來ない。尙接種前後に於けるツ反應は二千倍及び百倍ツベルクリン液を用ひ、皮內注射後四十八時間の判定で發赤四粍以下のものに傳研製材料〇・〇二瓩を上膊外側皮下に注射し、接種後ツ反應の發赤五粍以上のものを陽轉とした。

六、過去六年間の結核豫防事業成績

第十一表　地區內學童結核罹病率、「ツ」反應陽轉率及陽轉發病率

年次	檢査人員	結核罹病兒童		活動性結核兒童		「ツ」反應陽性轉化者		陽轉發病者	
		總數	%	總數	%	總數	陽轉率%	總數	發病率%
昭和十一年	一四九二七	八一〇	五・四三	二四〇	一・五九				
同　十二年						五七四	七・三	六七	一一・七
同　十三年	一五七九二	五九三	三・七五	二一四	一・三三	六一三	八・一	九四	一五・五
同　十四年	一五一一八	八三二	五・五〇	二七〇	一・七〇	六九七	八・八	八五	一二・二
同　十五年	一五〇六三	七一五	四・七四	二五四	一・六二	五七八	七・四	五九	一〇・二
同　十六年	一四八〇九	×三四九	×二・三五	二七〇	一・八二	六九二	九・一	九八	一四・二

第十一表に示す如く、年度によつて多少の差異はあるが、全體的にみると活動性結核兒童の發見率は毎年大差を示してゐない。これは結核兒童の一部が適切なる指導によつて、次年度には健康兒童として取扱ひ得るに至るも、これと殆ど同數の結核初感染發病兒童が加はる爲であると考へられる。然し他に都市學童に於ける結核蔓延狀況に關する充分なる累年統計が得られないため、本部事業成績の效果を比較檢討することが出來ない。

第十二表　地區內學童總死亡率及結核死亡率（括弧內は東京市の比率）

年次	在籍兒童總數	死亡數 總數	死亡數 結核	死亡率（學童に付き） 總數	死亡率（學童に付き） 結核
昭和十年	一五、六三七	四三	一八	二・七四（二・八八）	一・一五（一・〇七）
同　十一年	一五、〇六八	四二	一五	二・七八（二・八九）	〇・九九（一・一二）
同　十二年	一五、〇〇九	四二	一七	二・七九（二・八九）	一・一三（一・一八）
同　十四年	一五、八三三	三八	一三	二・四〇（未發表）	〇・八二（未發表）
同　十五年	一五、六六七	二二	一〇	一・四〇（二・五一）	〇・六四（〇・九三）
同　十六年	一五、五七八	二三	一〇	一・四七（二・〇三）	〇・六四（〇・八三）

地區內學童總死亡率及び結核死亡率は第十二表に示す通り近年幾分低下の傾向を示してゐる。今後年二回の集團檢診を續行して其の活用を圖ると共に、學童に對する結核豫防教育に努力したならば、他方學童家庭延いては一般社會の結核豫防事業の强化と相俟つて結核兒童の減少を招來することも困難では無いと考へられる。

七、體育指導

各種身體檢査の結果、健康なりと診定した兒童に對しては普通の時は勿論、夏期は京橋區臨海團、水泳會を組織する等各種の積極的體育運動によって其の錬成を圖った。又一部兒童に於ては、前年度に引續き兒童個々の體力簿を作製し、身體型態測定と共に、各種の運動能力測定を實施したが、其中の一部を示せば第十三表の如く、國民學校兒童

第十三表　昭和十五年及十六年度に於ける體力測定成績（同一人に付き測定せるものゝ平均値）

在籍校名	鐵砲洲國民學校				京橋高等家政女學校			
性別及人員	男兒　七一名		女兒　八〇名		女生徒　八一名			
測定種目＼測定の時	第五學年時	第六學年時	第五學年時	第六學年時	第一學年時	第二學年時		
身長（糎）	一三〇・一八	一三四・四七	一三〇・六五	一三六・五一	一四三・二八	一四七・二一		
體重（瓩）	二六・七五	二九・一八	二六・一四	三〇・一五	三五・一三	三九・〇一		
胸圍（糎）	六三・一〇	六五・一八	六一・六一	六四・七五	六九・三二	七一・七五		
坐高（糎）	七二・〇七	七三・三〇	七二・四四	七四・七九	七八・二八	八一・〇二		
肺活量（瓩）	一七八七・〇	一九九八・六	一五五五・〇	一八二七・二	二〇二七・〇	二二二六・〇		
背筋力（瓩）	四五・八〇	五五・一〇	四一・〇〇	四九・九八	六一・六〇	六三・〇二		
握力（瓩）右	一六・七八	二一・〇四	一五・二三	一九・二三	二二・一	二六・〇一		
握力（瓩）左	一六・一二	一九・一四	一三・二八	一七・九六	一九・九	一三・二〇		
兒童五十米疾走（秒）	九・〇七	八・八四	九・九三	九・一七	一九・三〇	一八・八二		
生徒百米疾走（秒）								
五十米荷重疾走（秒）	一四・四〇	一一・七一	一五・一五	一一・九四		一五・八九		
立巾跳（米）	一・六八	一・七三	一・五一	一・六一	一・八〇	一・七七		
懸垂（回）	一・八	三・五						
臂立伏臥（回）			一七・五	二三・一	一八・五	一〇・一		
連續片脚跳（米）	二一四・四三	三四三・六七	一五九・〇九	二三二・〇〇	一二四・三〇	九八・八〇		

に於ては一年前の成績に較べ、型態的にも運動能力方面に於ても極めて顯著なる發育又は進歩を示してゐる。

家政女學校生徒に於ては、型態的には一年前に較べて著明なる發育を示してゐるが、立巾跳、臂立伏臥、連續片脚跳等に於ては進歩の跡認められず、寧ろ低下の傾向が認められ、背筋力に於ても國民學校高學年女兒の成績に比較して優秀の度が低く、女學校低學年に於ける體育指導の根本方針に一つの示唆を與へてゐる。

八、生活指導

學校衞生事業の重點を各種身體檢査成績の活用、殊に體育指導への利用と、傳染性疾患の豫防處置（急性傳染性疾患の豫防事業は本館防疫部に於て擔當してゐる）に置くことは勿論重要なことであるが、更に兒童の生活全般に亘る指導に努力しなければ到底本事業の實效を期することと困難である。依て本年度は區内全學童及未就學兒童一萬五千名に就て、衣食住、運動、休養、清潔、姿勢其他各種の家庭生活樣式に就いて調査し、其の結果に基いて偏食不良姿勢其他の惡習慣の矯正、休養の適正化、環境の改善等を圖つた。調査成績中主要なる部分は次の如くである。

(一) 住居の疊數は一二——二四枚のものが約半數で、次が七——一二枚のもので二九%あつた。

(二) 日當りの特に悪い家庭が一四%、通風の特に不良な家庭が四%、濕氣の非常に多い家庭が九%で、結核家族の多かつた地域にかゝる環境不良な家庭の多かつたことは注目に價する。

(三) 偏食の多い食品名から順に擧げると、人參、ねぎ、煮干、がきフライ、うなぎ、午蒡、茄子、わかめの順で兒童の二〇——三三%がかゝる食品を嫌つて殆ど食べてゐなかつた。

(四) 間食する兒童は男女共八九%で、お小遣は一日三——五錢のものが約半數で、次が二錢以内、六——十錢のものであつた。

(五) 就寢時刻は低學年兒童では午後七—八時、高學年兒童では八—九時の者が多く、睡眠時間は九—十時間のものが最も多かつた。一校では午後九時過ぎに就寢する者が五年以下では八%以内であつたが、六年生では三五%で、睡眠時間八時間以内の者が四年生以下では〇・四%に過ぎなかつたが、六年生では六%もあつた。

(六) 食後に含嗽をしないものが二九%、食物をよく咀嚼しないものが男では三八%、女では二六%あつた。

(七) 勉學、食事、歩行等の際姿勢の特に悪いものが一〇%あつた。

九、虚弱兒童の錬成

本部に於て、醫學的檢査に基いて選定した國民學校第三學年以上の虚弱兒童を毎學期一〇〇名宛、靜岡縣宇佐美村に設立した京橋區健康學園に收容し、好適環境の下に、普通の教科を授けると共に規律的生活を營ませ、毎日午後を體操の時間にし、體力によつて兒童を四群に分けて訓練を行ひ、傍ら體力檢査を施行し、其れによつて虚弱兒童の體力並に精神力の强化を圖ると共に、虚弱兒童錬成の參考資料を得ることに努めてゐる。

豫防部事業成績

豫防部の事業は、急性傳染病及び流行病を除いた一般疾病の豫防を目的として居るが現下の我國狀より、結核、トラコーマ、性病、特種精神病、神經性疾患及び寄生蟲病等の豫防を主として居る。

地區民の保健館事業に對する理解は年と共に高まり、相談利用者も愈々增加して居る、十六年度豫防部事業中特記すべきことは前年に引續き月島模範保健地區內、新佃西町全住民の結核及びトラコーマに關する集團檢査を小兒衞生部、厚生科學研究所疫學部等との協同にて施行したことで、此等は月島模範保健地區事業の基礎調査であると共に我國の大都市に於ける疫學的研究の貴き資料を加へたものと云つてよいと考へられる。

研究報告としては第十七回結核病學會に昭和十五年に行て月島一之部會住民の集檢の成績を「部市民の間に於ける結核蔓延狀況」と題して報告した。

一、結核豫防

保健館に於ける結核豫防は豫防部に於て總括することになつて居るが、實際の仕事は館の組織に從つて小兒衞生部學校衞生部、社會衞生部といふ風に殆んど各部に於て分掌されて行はれて居る。最近國家の結核豫防事業に對する熱意を映じ本館に於ても益々盛となり、徹底を期することに向つて進みつゝあることは喜びに堪へない。

吾等は單なる調査、罹患發見に止まらず、罹患者の處置、早期治療に向つて努力すべきであることを信じ、本年度は特に人工氣胸術の施行に努めた。

保健館で行つて居る結核豫防事業の主なる仕事は、患者の發見、隔離斡旋、保護監視、早期措置及び豫防教育（個人及び集團）である。

京橋區役所を通じて入手し得る地區內現住者結核死亡は、本年度に於ては八四名內男九五名女八九名で、前年に比して稍々增加して居る。一八四名中肺結核に依る死亡は一三八名で、一五才より三〇才に至るまでのものは七八名を占めて居る。是等結核死亡の死亡場所に就いて調査するに、自宅が九二名、入院また入所が七四名、府外に轉出して居るものが一八名となつて居る。（第一表、第二表、第三表）

地區內より本年度內に東京市療養所に入所せるものは一一八名で男七二名女四六名で昨年より稍々減少して居る。（第四表）

入所申込者の待期々間中重症なるため來館することを不能なるものに對しては、本館醫師による巡回診療を行なつて居るが、本年は二〇四回、二十五件であつた。

保健婦及び保健指導婦による結核家庭訪問指導に就ては、保健指導部報告にある。

「家族內結核感染の調査」及び「都市結核の蔓延狀態に關する調査研究」は繼續中である。

成人健康相談は本館及び分館に於て行はれて居るが、本年度取扱ひ數は第五表の如く新來三、六一四名、再來一〇、八七六名で、合計一四、七九〇名（男七、五〇六名、女六、七八四名）で、一回平均相談取扱數は約六十名餘に及んで居る。

此等の相談者に對して施行した處置は「ツ」皮內反應三、六四〇名、赤沈反應六、三七〇名、X線透視七、二三三名、X線寫眞撮影七三四枚、氣胸術施行回數實に三、八六二回に上つてゐる。（第六表）

新來者にして診斷を施行せるもの三、〇三〇名に就きて見るに第八表の如く結核現症者四九四名（一六・三%）にて咯痰中菌陽性者は四五名（一・四八%）である。なほ健康者は九七五名（三二・一七%）結核外有疾者は一、二七六名（四二・一一%）であつた。再來者では結核患者の數は遙かに高い割合であることは勿論である。

なほ成人健康相談者（新來）に就いて行つた、「ツ」皮內反應の成績は第七表の如く、男、女、平均して七六名となつて居る。

月島模範保健地區に於ける一般住民の集積三、三七二名に於ては、別表の如く「ツ」皮內反應平均陽性率五七・七九%、罹患者發見率は活動性結核一・九五%、其他疑活動性患者及び要注意者を併せて三・〇五以內といふ成績であつた。

第一表　月別結核死亡數（昭和十六年四月—昭和十七年三月）

月別	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一	二	三	計
男	八	四	一〇	八	一三	五	一三	九	二	一三	五	五	九五
女	五	一二	八	九	八	九	七	七	五	四	九	六	八九
計	一三	一六	一八	一七	二一	一四	二〇	一六	七	一七	一四	一一	一八四

第二表　地域別結核死亡數（昭和十六年四月—昭和十七年三月）

地別	一部	二部	三部	四部	五部	六部	七部	八部	九部	計
男	六	三	二	六	九	六	八	一〇	四五	九五
女	六	四	三	一九	二〇	一八	一六	二三	七九	一八四
計	一二	一	一	三	一一	一〇	一八	一三	三四	八九

第三表　年令別結核死亡數（昭和十六年四月—昭和十七年三月）

年齡階級	死亡數 肺結核 男	女	其他ノ結核 男	女	計 男	女	死亡場所 自宅	病院療養所	府外	合計
〇—四			四	五	四	五	五	四		九
五—九	一		一	二	二	二	一	三		四
一〇—一四	二		二	一	二	三	四		一	五
一五—一九	一	一四	三	三	一七	一五	一四	一六	二	三二
二〇—二四	一八	一七	六	六	二三	二四	二二	一八	七	四七
二五—二九	一一	六	三	二	九	一三	一二	九	一	二二
三〇—三四	六	一一	一	一	一二	七	六	一〇	三	一九
三五—三九	三	五		一	五	四	三	五	一	九
四〇—四四	五	六	二	一	八	六	八	三	三	一四
四五—四九	三	三	二		五	三	八			八
五〇—五四	四				四	一		三		五
五五—五九	三						二	二		三
六〇—以上	六				六	一	六	一		七
計	七五	六三	二四	二二	九九	八五	九二	七四	一八	一八四

第四表　地區の療養所及委託病院入院患者數（自昭和十六年四月至昭和十七年三月）

年齢性別＼月別	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	昭和十七年一月	二月	三月	計
〇—二四 男	四		三	二	一	四							三三
〇—二四 女	五	二	二	三	三	三	四	四	二	四	三	四	二二
二五—三四 男	二					三							二一
二五—三四 女	二	一	一	四	一	二	三	一					一一
三五—四四 男			一	二	一				二				一三
三五—四四 女		一				四		一			一		七
四五—五四 男			一							一			二
四五—五四 女													二
五五以上 男													二
五五以上 女													一
計 男	六	二	六	七	三	一	五	八	四	五	四	一	七二
計 女	七	二	五	五	五	五	六	三	二		二	四	四六
總計	一三	四	一一	一二	八	一六	一一	一一	六	五	六	一五	一一八

第五表　成人健康相談月別來訪者數（昭和十六年四月—昭和十七年三月）

性別＼月別	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	昭和十七年一月	二月	三月	合計
新來 男	一三一	一九八	二〇四	二〇八	二九〇	一九三	一四四	九三	九八	九三	八三	一三九	一、八六二
新來 女	一七四	二〇二	二〇七	一八一	二四三	一九九	一三四	七五	六三	七一	六四	一四三	一、七五三
新來 計	三〇五	三九九	四一一	四八九	五三三	三九一	二八七	一六七	一六〇	一六四	一四六	二七三	三、六一四
再來 男	二九六	五九三	五三一	五三	四三九	七五三	五一四	四一五	三七三	三九三	五三四	五〇三	五、八四五
再來 女	三一九	四四二	四五三	四三八	三八七	五八八	三七五	三五四	二八七	四〇三	四五九	五二六	五、〇三二
再來 計	六一五	一、〇三五	九六六	九五九	八三六	一、三二一	八八九	七六九	六五九	七九六	九九三	一、〇三八	一〇、八七六
總計 男	四三七	七九一	七一七	七二九	七二九	九四五	六五八	五〇七	四七〇	四八六	四一六	九三一	七、五〇六
總計 女	四九三	六四三	六六〇	六一九	六二九	七八七	五三三	四二九	三四九	四七四	五三三	六六九	六、七八四
總計 計	九二九	一、四三四	一、三二七	一、三四八	一、三五八	一、七三一	一、二六七	九三六	八一九	九六〇	一、四三九	一、三〇〇	一四、七九〇

第六表　成人健康相談者數月別來訪者處置數（昭和十六年四月—昭和十七年三月）

性別＼月別	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	昭和十七年一月	二月	三月	合計
ツベルクリン皮內反應 男	一三三	一〇〇	一〇四	一〇八	二九二	一九四	一四四	九三	九三	九五	八三	一三〇	一、八七三
ツベルクリン皮內反應 女	一五六	二〇三	二〇八	一八三	二四四	一九九	一三六	七五	六三	七三	六五	一四三	一、七六七
ツベルクリン皮內反應 計	三〇九	四〇三	四一二	三九一	五三六	三九三	二八〇	一六八	一六〇	一六八	一四八	二七三	三、六四〇

總計		間接撮影	X線寫眞	X線透視	胸ノ氣	赤沈
計	男			二〇六	一一四	二一四
	女			二五〇	六七	二〇五
	計			四五六	一八一	四一九
一、三五九	五九〇		三	二〇六	一一四	二一四
二、〇三五	一、〇四五		四〇	三一七	二八一	二九八
三、〇九四	一、〇〇四		四〇	六三〇	三九五	六五〇
二、二三〇	一、一三〇		四八	二九八	一九三	二九四
二、一四一	一、〇九七		九七	二八〇	一〇七	六五八
二、二六六	一、一五四		七四	三一四	二一三	七四三
一、七九四	九三〇		一一三	二九〇	一五九	五三〇
一、四〇七	六三四		一一三	二八三	一五一	四七〇
一、一三〇	七四六		一一三	一九〇	一七四	一八七
一、一四七	五四六		一一六	一五六	一五六	一五〇
一、〇四〇	四九〇		一一六	一四七	一一六	一七一
二一、〇四九	一一、〇〇〇		一〇、〇〇六	一一、二四七	一一、四九七	二一、七五六

子					女					
(一)	%	(±)+(+)	(±)	%	(+)	判明者	不明者	總數		
五二	五一・六一	一六		五一・六一	一六	三	九	四〇		
		一六三		六七	八六	二				
一六・二三%		四九四		二八三	三二一	六	三	五		
		三		三						
		七四		五三	三三			二		
		七七		五五	三三			二		
四三・二二%		一一五六		五四九	八六二	七	三	六		
三三・二七%		九五五		五二九	四五六	六	六	五		
六・八六%		二〇八		一〇九	九九	三	四	六		
		二一四九		一一三三	一一三七	一六	二二	九五		
		二一〇三〇		一一五〇	一一四八〇	二六	一六	六六		
				二一〇三〇		一一六		一七七		

第七表　成人健康相談來訪者初診時の「ツ」反應成績

年齢＼反應＼性別	總數									男									女								
	總數	不明者	判明者	(＋)	%	(±)	(＋)＋(±)	%	(－)	總數	不明者	判明者	(＋)	%	(±)	(＋)＋(±)	%	(－)	總數	不明者	判明者	(＋)	%	(±)	(＋)＋(±)	%	(－)
一〇—一四	七三	一七	五六	三〇	四三・五	一	三二	五三・三	二五	三三	八	五	一四	二六・〇	一	二二	六〇・〇〇	一〇	四〇	九	三二	一六	五・六一		一六	五一・六一	五
一五—一九	七三二	一二九	五六九	三五九	六〇・三	二三	二六二	六四・〇九	一一四	四四	六〇	三五四	一〇八	五六・五	一七	二三五	六三・五	一五	三三	七九	二四二	一五一	五三・九	六	一五一	六四・七	八五
二〇—二四	六五一	一四八	五三七	三八一	七〇・九	一五	四六	七六・六〇	一三一	三六四	八五	二七九	一一五	七〇・六	一一	二三六	六一・〇〇	九	三三	六六	三五八	一六六	六四・四	一四	一〇	六九・六六	七八
二五—二九	四八一	一二三	三五	三三二	七三・六	一四	二五六	八一・六六	五	二〇一	四七	一四四	一一〇	七七・九	一一	一三三	八三・七	三	三七	六六	一六一	一一一	六九・五六	二	一四四	七〇・〇一	三五
三〇—三四	三〇七	八六	二二一	一六〇	七一・九	一八	一二八	八〇・五六	四三	一五三	四七	一〇五	一八一	七七・一四	一〇	九一	八四・三五	一四	一五七	五五	一一六	七九	六六・一〇	八	一〇	七五・〇〇	五九
三五—三九	二九五	二六六	一八三	一三七	四四・八	一九	一六六	八四・四四	一七	一一一	一三	九	八一	八七・八一	一一	九九	九三・九二	六	一一八	一四四	八四	一六	六六・六六	七	一六	六四・〇〇	一三
四〇—四四	一六〇	二八	一五一	一一一	九六・〇	一〇	一三一	八一・八一	一一	七八	一一	六六	五一	七七・三三	五	五六	八四・八四	一〇	一〇三	一六	八六	一〇	八一・九二	五	一五	九五・〇〇	一一
四五—四九	一一一	三一	九九	七四・一〇	八一・〇	四	七八	八六・六六	一一	五八	一〇	三八	三五	八六・八四	一	三五	九三・一〇	三	六三	一一	五三	四一	七八・八四	二	四三	八一・九六	九
五〇—五四	九一	二六	六五	四七	七三・〇〇	九	一六六	八六・一五	九	四〇	一七	三三	一七	七七・九	四	三一	九一・〇〇	二	五一	九	四三	三〇	七一・四三	二	五一	八三・三	七
五五—不詳	一九〇	四八	一四一	九九	六六・三	三〇	一一七	八一・三九	三五	九一	一〇	七三	四四	七七・〇〇	七	六一	八四・七三	一一	九八	二八	七〇	四四	六一・四四	一二	一六六	八〇・〇〇	一四
合計	三、〇七七	七〇三	二、三八四	一、六六一	六六・六九	一・三三	一、八一四	七六・〇九	七〇〇	一、七四四	一四七	一、三七七	八五五	七一・一一	八一	九六六	七七・七三	三六一	一、五三三	二六六	一五四	七七六	六七・〇七	一五	八四八	七三・三九	三〇九
(±)					〇・九四			〇・八五						一・二八			一・一七						一・六六			一・三〇	

第八表　成人健康相談來訪者初診時の結核性疾患の病類別患者數

年齢	〇—九		一〇—一四		一五—一九		二〇—二四		二五—二九		三〇—三四		三五—三九		四〇—四四		四五—四九		五〇—五四		五五以上		不詳		小計		總計	
種別＼性別	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
肺結核 陽性					五	五	四	七	四	二	三	四	二	三	一	二			一	一	一				二	二四	四五	一・四八%
肺結核 陰性					四	八	三	五	五	四	二	四	一	四		三		六	一	一	一	四			二七	五九	五六	一・八四%
喉頭結核											一							二							一	二	三	
肺門及氣管枝腺結核					一	四	一	三	一															一	三	一〇	一三	
肺浸潤		一	一	二	二五	一六	二五	六	六		一	六	一	七	二	一	三	一			一		一	一	五一	一六六	二二七	
肋膜炎（現症）	一	一	二			三	六	四	五		一	五	一	一	一		一						二	一	四四	四四	五八	
喀痰結核									一																	一	一	
粟粒結核																												
脊柱骨カリエス							一																					
腸膜炎及ビ腹膜炎	一				三	二	三	一	一		三														一一	四	五	
泌尿器結核																												
其他結核性疾患					二	二	二	三	一										一						五	六	一一	
要觀察	九	三	三五	三四	二四	二〇	八	九			五		六		四		二				二			二	八六	六六	一六三	
計	一二	六	八三	九四	七七	六〇	一九	二九	一一		三五		一一		一九		八		一一		四		三	六	三一	二六三	四九四	五六・一三%
石灰沈着		一		一																						三	三	
肋膜胼胝					五	一〇	六	一七	五	一一	四	三				六		二		一					三	三五	六四	
計		一	四五	一一	六	一七	五	一一	四	三						六		二		一					三	五五	七四	
修了再檢査	一〇	一一	四七	一〇九	一一一	一六	一〇四	六六	六六	六〇	七一	五五	四四	四六	二九	三八	三七	六六	三	七	四				八三	五四	一一六六	四・一一%
病名不明者	三	八	九	一六	一一〇	一四六	八一	六三	五一	五〇	三一	二七	三四	九	一一	五	二〇	五	一〇	六	四				四六	五九	九七	三・一三%
計	三	四	一四	三五	二三	二四	二一	一八	一六	一八	五	七	六	九	六	二	五	三	五	二	三				九	一〇九	二〇八	六・六%
總計	三六	三〇	三一四	四五	三〇九	三三	二三二	一七	一五八	一四七	一一八	一一四	九三	七三	六三	四六	五〇	三八	九一	八六	一七	一六	一一六	一三	一四〇八	一五〇	三〇〇〇	
		六		一九九		六三		四九		三〇四		二三一		一六五		一一〇		八		一七		一六		三〇〇			

二、トラコーマ豫防及び眼科相談

トラコーマの對策としては、罹患者の發見、治療、特に早期の治療、トラコーマ教育が擧げられる。本部の事業として眼科相談は各種健康相談の一部をなすと共に、特にトラコーマ事例に重點を置き、かゝる慢性傳染病豫防對策に不可缺なる治療にも適格者に對して實施してゐる。尙事例發見の凡ゆる機會を捕へる爲、左の如き集團に對して檢診を行つた。

自昭和十六年四月	至同年六月	京橋區內國民學校定期身體檢査眼科檢診	約一萬五千名
同	年七月	國民體力管理法による乳兒眼科檢診	約千六百名
自同	年七月至同 年八月	京橋區內就學前兒童眼科檢診	約千六百名
同	年八月	月島模範保健地區內 新佃西町住民全員眼科檢診	約三千三百名
同	年九月十八日	視力保存日（眼の記念日）月島警察管內住民	約二百名
同	年十一月	銀座商店街店員	約五百五十名
自昭和十六年十二月至昭和十七年三月		東京市厚生醫療班に參加、出征遺家族眼科檢診	

以上の他、本館社會衞生部で扱ふ工場商店從業員數百名に對して眼科檢診を行つてゐる。

本年度に於ける眼科相談者の月別男女別分類は、第一表の如く、新來に於てに五、六、七、八、九、及び一月に多く、新再來に通計するに八、九、十月に多い。何れに於ても男に比し女の來館者が多い。

第一表　眼科相談月別來訪者數

性別＼月別	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	昭和七年一月	二	三	計
新來 男	一五	四四	三四	三六	五一	四八	二三	二三	七	三三	二	一五	三五一
新來 女	二一	四五	六四	三三	六五	五六	二四	三三	一八	二九	三四	三三	四四四
新來 計	三六	八九	九八	六九	一一六	一〇四	四八	五五	二五	六三	五五	三八	七九五
再來 男	一六六	一九一	二〇三	二一九	三三四	三六三	三七五	二〇三	二三五	二五〇	二七九	一八三	二、九七九
再來 女	三四五	二四五	三三五	三六六	五五四	六二三	五四五	四二〇	二九九	四〇〇	三九九	三〇四	四、八一五
再來 計	四一一	四六六	五七七	五八五	八七八	九七六	九二〇	六二三	六二四	六五〇	六七八	四八六	七、七九四
總計 男	一八一	二三五	二三六	二五五	二三三	二七五	三九九	二三六	二三二	二八三	二〇〇	一九七	三、三三〇
總計 女	二六六	二九〇	三八九	六九九	六九九	六六九	五六九	四五三	四一七	四二九	四三三	三三七	五、二九九
總計 計	四四七	五三五	六三五	六五四	九九四	一、〇八〇	九六八	六七八	六四九	七一三	三三三	五二四	八、五八九

次に新來相談者に就て、性別、年令、階級別の觀察を試みれば、第二表の如き結果を示し、七才―一四才に於て半數に近き四四％を占め、十四才以下を合計すれば六二％に及ぶ。

新來患者の病類別分類を行へば、第三表の如く、結膜疾患及び屈折異常に關する相談者の多數なるを見る。老視は屈折異常に非ざるも、眼鏡を要する點に於ては屈折異常者と見做して便宜上之に加へた。又、本病類別分類表作成に當つては各患者に就て主要なる疾患一個を數へて他を省略した。

第二表　新來相談者年令別性別分類

年齢別＼月別	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	昭和七年一月	二月	三月	計	男女計
一―六歳 男	二	一三	五	五	一三	九	五	九	〇	一三	七	四	八二	一四〇
一―六歳 女	四	七	七	二	八	九	二	五	三	三	六	二	五八	
七―一四歳 男	二	一六	一三	一八	一四	二五	一〇	一五	二	六	八	六	一四五	三五二
七―一四歳 女	七	一九	二〇	二四	二七	二五	一〇	二	一〇	一二	一三	八	二〇七	
一五―二四歳 男	六	八	四	六	八	五	五	七	四	一〇	五	二	七〇	一二五
一五―二四歳 女	三	四	三	二	四	二	二	二	三	四	四	二	四五	
二五―四〇歳 男	二	六	〇	四	四	一	二	一	〇	五	〇	〇	二五	一二五
二五―四〇歳 女	六	九	一〇	三	一〇	一三	七	八	一	七	九	七	九〇	
四〇歳以上 男	三	二	二	三	三	八	二	一	一	〇	一	三	二九	七三
四〇歳以上 女	一	六	四	二	六	七	三	五	二	三	二	四	四四	
合計 男	一五	四四	三四	三六	五一	四八	二四	二三	七	三三	二一	一五	三五一	七九五
合計 女	二二	四五	六四	三三	六五	五六	二四	二三	一八	二九	三四	二三	四四四	
總計	三六	八九	九八	六九	一二六	一〇四	四八	五五	三五	六三	五五	三八	七九五	

既に述べた如く、新佃西町居住者全員の眼科檢診の結果に就ては、醫事公論一五三九號に發表したが、トラコーマ罹患率は七・九にて、年令の進むに從ひトラコーマ罹患率高く、女子に於て男子より高い事を認めた。

第三表　眼科相談來訪者病類別

病類別＼月別	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	昭和七年一月	二月	三月	計	合計
慢性結膜炎 男	三	一四	七	一五	一三	一五	一四	八	五	二	六	二	九九	二二五
慢性結膜炎 女	七	一五	一九	一二	一三	一三	一七	七	七	七	四	二	一二六	
屈折異常 男	三	八	七	一〇	一三	一二	一〇	四	二	七	七	二	九二	一六三
屈折異常 女	六	八	一八	九	九	九	一五	一〇	三	一	六	二	七〇	
トラコーマ 男	二	五	七	五	二	三	一〇	二	二	五	二	三	五三	一五一
トラコーマ 女	六	一二	一五	八	三	九	九	八	五	三	三	四	九九	
急性結膜炎 男	〇	三	四	三	六	二	一〇	七	七	〇	四	二	五四	一三
急性結膜炎 女	〇	三	四	三	六	二	一二	三	九	一	一五	五	六七	
徵兵檢査（異常ナシ） 男	六	七	〇	〇	二	二	一	二	五	三	一	四	三四	三四
徵兵檢査（異常ナシ） 女	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
眼瞼緣炎 男	〇	二	二	〇	〇	〇	一	二	二	一	一	二	八	一七
眼瞼緣炎 女	一	三	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
結膜フリクテン 男	〇	〇	一	一	二	二	一	一	一	〇	一	一	四	二三
結膜フリクテン 女	〇	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
角膜翳 男	〇	一	二	〇	二	一	〇	一	一	〇	一	一	七	一〇
角膜翳 女	〇	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	

病類別＼月別	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	昭和七年一月	二月	三月	計	合計
淋菌性結膜炎 男	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一〇
淋菌性結膜炎 女	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
春季カタル 男	〇	一	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一二
春季カタル 女	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
結膜出血 男	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一七
結膜出血 女	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
濾胞性角膜表層炎 男	〇	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一三
濾胞性角膜表層炎 女	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
點狀表層角膜炎 男	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一二
點狀表層角膜炎 女	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
深層角膜炎 男	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一二
深層角膜炎 女	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
硬化性角膜炎 男	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一三
硬化性角膜炎 女	〇	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
角膜フリクテン 男	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一一
角膜フリクテン 女	〇	〇	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
角膜實質炎 男	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一一
角膜實質炎 女	〇	〇	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	

角膜潰瘍		鞏膜炎		虹彩毛様體炎		老人性白内障		先天性白内障		硝子體出血		飛蚊症		網膜出血		中心性網膜炎	
男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	一	○
○	一	○	○	○	一	○	○	○	○	一	○	○	一	○	○	○	○
○	○	○	一	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	一	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	一	○	○	一	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	一	○	○	○	○
○	○	○	○	○	一	○	○	○	一	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	一	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	一	一	○	○	○	○	○	二	○	○	○	○
○	一	○	一	○	二	一	二	○	一	二	○	○	四	一	一	一	○
一		一		二		三		一		二		四		二		一	

網膜炎		視神經萎縮		麥粒腫		霰粒腫		涙鼻管狹窄		眼瞼下垂		外斜視		皮膚性內反症		先天性虹彩缺損	
男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
○	○	○	○	○	○	○	一	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	一	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	二	○	○	○	○	○	○	一	○	一	○	○	○
○	○	○	○	一	○	一	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	一	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
一	○	一	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	一	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	一	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	一	一	○	○
○	一	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	一	一	一	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	一	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	一	○	○
○	○	○	○	○	一	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
一	二	一	○	三	四	三	一	○	一	一	○	一	一	二	二	一	○
三		一		七		四		一		一		二		四		一	

	小角膜		眼球震盪		三叉神經痛		色神異常		計		合計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計
昭和十三年	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一五	二	三六
昭和十四年	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	四四	四五	八九
昭和十五年	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一	三四	六四	九八
昭和十六年	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	三六	三三	六九
昭和十七年	〇	〇	〇	〇	一	〇	〇	〇	五一	六五	一六
昭和十八年	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	四八	五六	一〇四
昭和十九年	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	二四	二四	四八
昭和二十年	〇	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	二三	三三	五五
昭和二十一年	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	七	一八	二五
昭和二十二年	〇	〇	〇	〇	一	〇	〇	〇	三三	二九	六二
昭和二十三年	〇	〇	〇	一	〇	〇	〇	〇	二	三四	五五
昭和二十四年	〇	〇	〇	〇	一	〇	〇	〇	一五	二三	三八
昭和二十五年	〇	〇	一	一	三	〇	一	〇	三五一	四四四	七九五
計	一		一		三		一		七九五		

第四表　トラコーマ罹患率推移

	東京全市	京橋區	東京全市	京橋區
昭和十三年	四・二	五・九	昭和十五年	三・五
昭和十四年	三・五	五・三	昭和十六年	全市の資料なし
				三・〇（主任者海外出張中）

本部に於て京橋區のトラコーマ豫防事業を初め既に五年に及び、一應其の成績を批判すべき時に到達したと考へるのであるが、茲に區内學童トラコーマ罹患率の推移と全市の夫れを比較すれば第四表の如くであり、京橋區に於ける減少の傾向な全市より更に著しい。此の資料は定期身體檢査眼科檢診の成績より得たものである。

三、性病豫防——性病相談

性病豫防事業として行つて居る仕事は、性病相談による早期診斷と性病に對する豫防知識の普及である。

昭和十六年度、性病相談に於ける取扱數は新來七〇四名、爾來九五名合せて七九九名、内男三七四名、女四二五名である。

診斷別に觀るに、七五一名中黴毒は六三四名（男、二四六名、女三八八名）であり、淋疾は男二一名、女二名計二三名であつた。

本相談で行つた黴毒血清反應施行者は男女合せて五七四名で、陽性數は一〇二名で一七、八％の陽性率にあたつて居る。なは内譯すれば男二〇七名で、陽性率は二六・六％、女は三六七名で陽性率は一二・八％であつた。

第一表　性病相談月別來訪者數

月別	新來 男	新來 女	新來 計	昭和七年一	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	計
性別														
男	三一	二八	三一	二二	一一	二五	二六	二七	三一	三六	三一	二八	三一	二九四
女	一一	五七	四五	三四	二一	四三	二六	四八	三三	三四	四五	五七	一一	四一〇
計	四二	八五	七六	五六	三二	六八	五二	七五	六四	七〇	七六	八五	四二	七〇四

第二表　性病相談者診斷別來訪者數

診斷＼性別	男	女	計
性病診斷	三三八	四一三	七五一
淋疾	二一	二	二三
黴毒	二四六	三八八	六三四
下疳	一	〇	一
治療所指定性病療法	四八	二一	六九
結婚適否	二	〇	二
皮膚病	二二	二七	四九
泌尿器	一二	五	一七
其他	二二	一四	三六

第三表　來訪者血清反應成績

性別	採血數	陽性數	陰性率
男	二〇七	五五	二六・六
女	三六七	四七	一二・八
計	五七四	一〇二	一七・八

	再來 男	再來 女	再來 計	總計 男	總計 女	總計 計
	七	一	八	三八	一二	五〇
	一二	三	一五	四〇	六〇	一〇〇
	一四	二	一六	四五	四七	九二
	一三	一	一四	四九	三五	八四
	六	二	八	三七	三五	七二
	三	二	五	三〇	五〇	八〇
	七	〇	七	三三	二六	五九
	二	一	三	二七	四四	七一
	五	二	七	一六	二三	三九
	一	〇	一	二三	三四	五七
	七	一	八	二五	二四	四九
	三	〇	三	一一	三五	四六
	八〇	一五	九五	三七四	四二五	七九九

四、精神衞生——精神衞生相談

精神衞生事業で現在實施してゐる主な事項は、精神神經疾患の早期發見及び適切な治療處置の指示を目的とする精神衞生相談及び精神病發生豫防に關する知識の普及である。

本年度に於ける精神衞生相談の取扱總數は一一八名（男六四名、女五四名）であつて、其中新來七二名（男四三名女二九名）である。

精神衞生相談月別來訪者數（昭和十六年四月—昭和十七年三月）

	四月	五月	六月	七月	七月	九月	十月	十一月	十二月	一月	二月	三月	計
新來 男	八	六	四	五	二	三	三	二	四	二	一	三	四三
新來 女	一	三	四	六		三	五	二	一	一	三		二九
小計	九	九	八	一一	二	六	八	四	五	三	四	三	七二
再來 男	三	五	二	二	一	三	一	一					二一
再來 女	一	一	四	一	一	二	六	三	三	三			二五
小計	四	六	九	三	二	五	七	四	三	三			四六
總計 男	一一	一一	九	七	三	六	四	三	四	二	一	三	六四
總計 女	二	四	八	七	一	五	一一	五	四	四	三		五四
總計 計	一三	一五	一七	一七	四	一一	一五	八	八	六	四	三	一一八

新來者の診斷別分類を見れば七二名中精神薄弱一五名で最も多く、精神分裂病八名、癲癇六名、神經質五名等がこれに次いで居る。

精神衞生相談病類別來訪者數（昭和十六年四月―昭和十七年三月）

病名＼性別	男	女	計
精神分裂病	二	六	八
躁病			
癲癇	三	一	六
徵候性ナルコレプシー			
進行麻痺	一		一
高血壓ニ依ル精神障碍			
腦動脈硬化	三	一	三
腦炎後パルキンソニスムス	一		一
腦炎後性格異常	一		一
夏期腦炎後ノ遺殘狀態（痕跡）	一		一
腦腫瘍			
性格病質			
精神病質	二	一	三
神經質	一	四	五
神經衰弱		一	一
偏頭痛	一		一
精神薄弱	二	三	一五
痴愚		三	三
精神發育制止	一	二	三
同遲帶		一	一
腦性小兒麻痺	一		一
夜尿	三		三
正常	六	一	七
不明			三
合計			七二

防疫部事業成績

本部の對象とする疾患は法定傳染病、百日咳、痲疹等の急性傳染病である。本地區に於ける防疫事業としては患者の隔離、汚染物件の消毒、保留者檢索等による傳染源の探索と其防疫措置、各種豫防接種、飲食物營業者の取締りと指導、傳染病豫防に關する衛生教育等であるが、本部は其事業の一部を擔當して防疫の實際に當ると共に常時疫學的調査研究を行ひ、防疫事業の改善に向つて努力して居る。

一、地區内に於ける主要急性傳染病の發生狀態

法定傳染病の發生狀況を表示すれば第一表及び第二表の如くである。本表以外のものとしてはペストは大正三年以來、發疹チブスは大正五年以來、コレラは大正十四年以來、痘瘡は昭和三年以來其發生を見ない。痲疹と百日咳は屢出が無いため患者數を示し得ないが、死因統計によれば痲疹死亡數は一七、百日咳死亡數は二三で昭和十五年に比して何れも著しく增加して居る。

二、防疫事業成績

防疫事業中、官公署で行はれる患者の隔離、消毒、保菌者檢索等の昭和十五年度成績を示せば第三表の如くである。保菌者檢索の二一、六九〇中赤痢菌五二件、腸チフス菌八件、パラチフス菌二件、流行性腦脊髓膜炎菌三件を檢出し、檢病的調査による注意患者の中赤痢四名が發見された。

豫防接種の成績は第四表に示す如くである。この中赤痢豫防内服藥は警視廳が主となり、各警察署を介し、町會より配布したものである。又腸チフス豫防注射は主に町會主催にて施行されたものである。定期種痘は公種痘並に本部防疫相談日に行はれたもので一般の私種痘は除外した。(私種痘數は六八二である)

尙本表以外に本年度九月、中央市場關係者其他一四、六八七名に對しコレラ豫防注射が施行された。ヂフテリア豫防注射は前年同樣數へ年二歲を第一期三歲を第二期として夫々規定の注射を繰返して行ひ、更に國民學校又は幼稚園に就學した時シツク反應を檢し(第五表參照)、その陽性者に豫防注射を行つた。二歲、三歲の幼兒には豫防液として、本市衞生試驗所製精製明礬トキソイドを、又學童、園兒には主として傳研製精製アナトキシンを用ひ、一週間間隔二回式として施行した。尙第一期、第二期該當者に對する通知は前年同樣區役所よりの記名告知書を以てした。全市に比しヂフテリア罹患率が著明に低く、且其死亡率が前年に引續き低率であることは豫防注射の效果の現れを物語るものである。

防疫知識の普及啓發は、家庭訪問、學校教育、講演會、座談會、講習會、映畫會、印刷物の配布等により特に手指の清潔を强調して行はれた。

三、調査研究

(一) 赤痢の疫學的研究中(厚生科學第二卷第四號)本調査は赤痢が家族的に集積することゝ、赤痢患家の分布が散發的であることを確率論的に證明したものである。

(二) 赤痢の蔓延樣式の調査

地區内の一部(湊町、小田原町)に於て食生活調査と發生患者の系統調査を行つた。其結果は一般に外食、買喰

との關係明かでなく且特定の菓子屋、飲食店による多發例を認め得なかつた。

（三）生活指導による赤痢豫防の實驗

地區内の一部（新佃島東町、約六〇〇世帯）を對象として一世帯當り石灰半俵、ネオキシロン二〇倍液一合、石鹸一個を配布し、專任指導員二名（途中より一名）が六月中旬より九月中旬迄の三ケ月間に、三乃至四回に亘り各戸を訪問して、下痢の場合の手の消毒、用便後の手洗、汚染場所の消毒、便所改良、買喰防止等の指導を行つた。指導により手洗ひの如きは相當勵行されたやうであるが、期間中患者の發生を見なかつたことを其效果とするには地區が小である。

（四）豫防注射による赤痢豫防の實驗

地區内の一部（京橋署管内）の三歳乃至七歳の幼兒を對象として、嚴密な方法によつて實施し其效果の有無を觀た。數が不充分で斷定的の事を云へないが、其成績は思はしくない。

（五）ヂフテリア豫防注射の效果

引續き觀察中である。

第一表　法定傳染病患者死者數

病類別＼年次	昭和七年	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年	昭和十四年	昭和十五年	昭和十六年
總數 患者	四五七	六七二	六〇六	六二四	五二五	七〇八	七三二	八四一	七八八	四八八
總數 死者	九〇	九八	七九	七五	七五	一〇四	七一	一〇〇	八七	六五

第二表　法定傳染病罹患率、死亡率（人口壹萬對比）

病別類＼年次	昭和七年	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年	昭和十四年	昭和十五年	昭和十六年
赤痢 患者	一八七	二四五	二二七	二九五	二六五	四二三	三九〇	五五七	一五三	二四五
赤痢 死者	五六	五八	四五	五六	五三	七〇	四七	八一	七二	四五
腸チフス 患者	八四	八五	七六	七四	四四	六六	四六	五二	三八	五一
腸チフス 死者	一五	一六	一四	六	六	九	七	一〇	七	一三
パラチフス 患者	一九	一四	一〇	一六	一六	二	一八	一五	一九	二四
パラチフス 死者	〇	〇	〇	〇	一	一	一	〇	二	〇
猩紅熱 患者	九四	一五五	一六七	一五八	一三七	一三九	一九二	一三九	一四三	一〇八
猩紅熱 死者	七	二	三	一	二	七	一	〇	一	一
ヂフテリア 患者	七一	一七二	一二四	七八	六〇	七四	八五	七六	七〇	五五
ヂフテリア 死者	一〇	二二	一六	一一	一二	一四	一四	八	一	四
流行性腦脊髓膜炎 患者	二	一	二	三	三	四	一	二	五	五
流行性腦脊髓膜炎 死者	二	〇	一	一	一	三	一	一	四	二
總數 罹患率	三三・一四	四七・六六	四三・〇五	四二・三五	三五・八九	四八・七三	五〇・七三	五八・六九	五五・三九	三四・五四
總數 死亡率	六・五三	六・九五	五・四八	五・〇九	五・一三	七・一六	四・九二	六・九八	六・一二	四・六〇